
そして世界が終わった頃に・・・

モンスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして世界が終った頃に・・・

【Nコード】

N2005Z

【作者名】

モンスター

【あらすじ】

我々は長い間の平和な暮らしの中で当たり前に感じていると思う。だがそんな当たり前な世界が突如、地獄へと変わったら人々は生き残れるだろうか・・・

第0章 始まり（前書き）

久しぶりのオリジナル小説です。完成度の高い小説を目指します。

第0章 始まり

皆は今の生活が普通のことだと思っているだろう。
長い間この生活を続けていたら誰だってそう思うだろう。
だがそんな世界は一つの出来事により崩壊した・・・

12月30日 PM11時 東京のあるアパート
どこからかドアを叩いている音がした。

その男が目覚ますと確かに玄関のドアを叩いてる馬鹿がいた。

「クソ、誰だ？こんな時間に」

男は玄関まで行くとドアを開けた。

「おい！うるさ・・・い・・・ぞ・・・」

いきなり肉が腐ったような匂いがした。

それもそのはずだろう・・・目の前には全身血だらけの男が居た。
目は白目。

腕は変な方向に捻じれ、さらにはその肉は腐っていた。

「お、おい！近寄るな！」

だが奴はお構いなしに俺へと近づいてきた。

奴が近づくとびに臭いはひどくなった。

なんとか部屋の中に戻ったがあることに気づいた。

玄関の扉を開けたままなのを・・・

案の定、奴は入ってきた。

「や、やめろ！うわーーーーー」

奴は俺を押し倒し腕を噛み始めた。

最後に見えたのは噛みちぎられた俺の腕だった・・・

その後男を喰い殺し、悲鳴を聞いてやって来た人々を喰い殺してい

った。

たった一体なら無理だろうがそれは問題ではなかった。

なぜなら奴らは嘸めばそいつを仲間に行けるから。

アパートから出ると真っ直ぐにマンホールの場所に行った。

マンホールを開けるとそれは中に入っていた。

これは今後起きる大事件の小さな始まりだった・・・

第0章 始まり（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

第1章 異変（前書き）

登場人物を募集するので出して欲しいキャラを送ってきてください。
良かったら採用します。

第1章 異変

東京・立川市 12月31日 AM7時

この日も俺は朝から起こされた。

(全く・・・大晦日だっていうのに)

こんな大晦日の日に朝早く起こされたのには訳があった。

昨日、母さんに病気でお婆ちゃんが倒れたと聞き、今日は大晦日だけどその看病に行くのだ。

寝ぼけながら階段を降りていった。

俺の家族は、母さんと二人暮らしで父さんは小さいときに死んでしまった・・・
車の事故だった。

リビングに入ると既に母さんが外行きの服に着替えていた。

「翼、起きたのね」

俺・・・遠藤翼は、冷蔵庫からミルクティーを取った。

俺は、実は、ティー系が大好きでこれまでもずっと飲んできた。

「は、相変わらずだね。それはそうと・・・今から九州に居るお婆ちゃんの所に

行くから。母さんが居ないけど大丈夫よね？」

「大丈夫だって。俺もうすぐ大学生だぜ」

それは本当の事だった。今高3で、4月になると大学生になる。そしてこの家から出ていき一人暮らしを始める予定だった。

「そうだけど・・・最近この辺りで謎の殺人事件が起きてるでしょ」最近起きてる事件というのは、人がどうやったらこんな風になるのかというほどの有様だった。なぜなら全身から噛みあとが発見されたり警察は野犬の可能性も指摘していた。・・・まあそんなことはある訳ないのだが。

「それより時間は良いのか」

母さんは壁に掛かってる時計を見た。

「まあ！もうこんな時間。もう行ってくるから戸締りちゃんとしてね」

それだけ言うと声をかける前に部屋から出ていった。

（はあ〜暇だな・・・そうだ！あいつらを呼ぼう！）

あいつらとは俺の友達、一人目は神山和俊。俺達のムードメイカーだ。

二人目は石井翔。俺達の高校のナンバーワンと言ってもいいほどのイケメンである。

早速電話をかけた。二人とも快くOKしてくれた。

20分後・・・

ようやくチャイムが鳴った。

玄関の扉を開けると和俊と翔が立っていた。

「おう！翼」

「久しぶり！翼」

二人を中へと入れると俺たちは二階へ上がった。

「例のものは持ってきてくれたよな」

例のものはただのPSPだった。

「ああ、持ってきてるぜ！」

「俺もだ」

二人ともPSPを出した。

今から何をするかというと・・・

「じゃあモンハンやろうぜ！！」

しばらくモンハンをやり続けた俺たちは時間が経つのを忘れるぐらい熱中していた。

外の異変にも気づかないままに・・・

「よし！クエストクリア！」

クエストをクリアした俺たちは俺の提案でPSPを一旦止めた。

「そついえば今何時だ？」

翔が言ってきた。

「ああ、えーと今は・・・2時だな」

そこで和俊が突っ込んできた。

「夜中の？」

「なわけねーだろ！昼のだよ」

そうだ！二時から観たいテレビがあつたんだ！

「ちょっとテレビ見るぞ！観たいドラマの再放送があるんだ」

テレビをつけるとドラマはやってなく、緊急放送とテロップが入ったニュースをやっていた。

「何だこりゃ・・・」

そこにはありえない映像が映っていた・・・

第1章 異変（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

第二章 蘇り始めた死者

テレビで流れている映像は驚愕のものだった。

東京・テレビ局

「練馬区や立川市で起きている暴動について情報が入りました。政府の発表によると一度死んだ人が蘇って人を襲っているとのことです」

そのテレビのアナウンサーは半信半疑な感じで言った。

「死者が蘇った理由として政府は、化学兵器説、魔術説、侵略説などなど多数の説が

上がっていますが理由は不明です。さてこの蘇ったとされる死者は足は遅く、目は白目、

全身の肉が腐っており一目見ただけで分かりますが、蘇った死者たちは物凄い数です。

決して練馬区や立川市へは近寄らないでください。その辺りに住んでいる人々は、

最寄りの避難場所へ行くか、東京を出るかそれとも家で鍵をかけて決して外には

出ないでください。繰り返します」

「・・・今死者が蘇ったとか言ったよな・・・しかもここや（立川）や練馬区って・・・」

「エイプリルフルじゃね？」

「あのな、今日は12月31日の大晦日だぞ。明日は新年なんだぞ」

俺が突っ込み翔が口を開いた。

「さっきのことが本当か確かめる方法があるぞ」

「ホントか!？」

「ああ、この家から外を見たら分かる。本当に死者が蘇っていたら外もそれなりの騒ぎになってるだろう」

「さすが翔!」

とりあえず部屋の窓を開けた。

「マジかよ……」

外は地獄の様だった……

死者が人を喰つてたりそこらじゅうに血だまりが出来たりしていた。

その時銃声が聞こえた。

「おい!あれを見る」

奴らに居場所がバレないよう小声で言った。

警官が外で死者に向け発砲していた。

「助けるか？」

和俊が言ったが俺はまだ様子を見ようと言った。

銃弾は死者たちの腹などに当たるが動きが少し止まるだけで警官に
少しずつ

近づいていった。その内、警官の銃の弾が無くなり入れ替えよう
としたときに

死者に囲まれてそのまま押し倒され噛み殺された。

これ以上見てられない状態になり窓を閉めた。

三人は、床に座り込んだ。

「これからどうする？」

「俺は家に帰ろうと思ってる」

和俊が良い翔も「俺も」と言った。

「分かった。まずは親に電話してみたらどうだ」

二人とも一斉に携帯で電話をかけた。

俺も母さんに電話するために一階に置いてある携帯を取りに行った。

携帯を取ると母さんの電話番号を押した。

「ただ今、大変電波が込み合ってます」

母さんは出ず機械の音声が聞こえた。

「ちくしょー！」

携帯を投げ捨てそうになり慌てて止めた。

その時二人が降りてきた。

「ダメだ・・・つながらねー」

どっちの携帯も繋がらなかったようだ・・・

「俺の母さんは九州に居ると思うから大丈夫だが、お前らはどうする？」

「俺は、今一人暮らしだからな。両親は埼玉に住んでるから大丈夫だろう」

翔は良かったが和俊は違った。

「俺は家族がまだ家に居るんだ」

「そうか・・・なら助けに行こう。良いよな翔？」

「ああ、ダメと言っても行くんだろう」

「その通りだ。とりあえず武器になりそうなものを持ってこよう」

とりあえず武器を集め始めた。その結果が金属バットを二本と、木製バットが一本だ。

なぜこれだけバットがあるかという俺が野球部だからだ。

「俺が金属バットを持つからあとは勝手に決めてくれ」

和俊が金属バット、翔が木製バットを持ち玄関に向かった。

「よし、行くぞ！」

・ ドアを開けようとしたとき隣の部屋の窓ガラスが割れる音がした・

第二章 蘇り始めた死者（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

第三章 情報

窓ガラスが割れたのは隣のリビングだ。

「和俊、翔、行くぞ！」

一気にドアを開けた。そこには窓ガラスを破って侵入してきた死者が居た。

死者は俺たちに気づくと襲ってきた。

「来んじゃねー！」

鉄バットでホームランを打つようにフルスイングして死者の腹に浴びせた。

死者は吹き飛んだが再び立ち上がった。

(おかしい・・・確かに骨が折れた感覚がしたのに)

再び襲ってきた死者に今度は柵から落ちてきた野球ボールを顔面に投げつけた。

彼はピッチャーであったから肩を温めてなくても130キロはあった。

顔面に命中し死者はあとずさったがそれでも死者は近づいてきた。

「クソ！どうすれば止まるんだよー！」

怒りに任せて死者の腕にバットでフルスイングした。

今度は腕が折れる感覚がした。

腕がブランとなってもまだ近づいてきた。

その時、小さいときに見たゾンビ映画の知識を思い出した。

「お前ら！こいつの後ろに回って気を引いてくれ」

翔と和俊がうしろに回って気を引いた。

「おい！クソヤロー！こつち向きやがれ！」

死者が和俊の方に振り返ると俺は死者の後頭部にバットを叩きつけた。

頭が割れ、死者は2度目の死を向かえた。

「ハア、ハア、終わったか・・・」

床に座り込んでしまった。

(初めて誰かの命を奪ってしまった・・・)

「翔、和俊、窓にバリケードを造ってくれ。当分立ち直れそうにな
い」

座りながらテレビを点けた。

ちょうど総理の会見が行われていた。

「既に同じような現象は日本中、いや世界中に広がってます。全人類は全滅の危機にあるのです！」

東京はほとんどの地域が壊滅し、機能を停止してます。一刻も早く東京から脱出してください。

政府は沖縄に移動されます。東京から脱出できない場合は、自衛隊の駐屯地または避難所へ行ってください。以上で会見を終了します」

その時気づいた。我々が長い年月をかけて造り上げた世界が急速に終焉へと向かっていることを・・・

「翼、終わったぞ」

割れた窓の所には棚や机が置かれてた。

「このまま和俊の家族を助けに行こうとも今のままでは外へ出れば5分ももたないだろう。」

だからテレビやパソコンで情報を集めるべきだ」

「ダメだ！それなら俺一人で行く」

和俊が一人で行こうとするのを翔が止めた。

「待て！今一人で行くのは自殺行為だ。さっきのを見ただろう。一体でも苦勞する相手が外に行けば数百人は居るぞ！もし俺たちがこの状態で行って死ねばお前の家族を助けるのも永遠に無理になるんぞ！！」

翔の言葉は和俊に聞いた。

「分かった。好きにしろ。だが最高でも一時間だぞ」

翔は笑いながら言った。

「ああ。それまでには終わる」

一時間後・・・

パソコンやテレビでたくさん情報が手に入った。

それを簡単にまとめてみよう・・・

1、死者（ネット上ではゾンビと呼ばれていたためこれからはゾンビと呼ぶ）は、知能は無く目は見えない。

だが以上に耳と鼻が発達しておりさらに大抵そばには仲間がたくさんいるので物凄い驚異となる。

弱点は頭でありその他の部位をいくら攻撃しても倒れることはない。銃弾を腹に何発も浴びても倒れなかったという報告もある（確認済み）

噛まれるだけでゾンビの仲間入りするので噛まれたものは置いていくか殺したほうが良い。

2、ゾンビ出現により東京はほとんど壊滅しており政府は沖縄に移された。

自衛隊は避難所や駐屯地、発電所や原発、その他重要な地域を守るのに精一杯で救助に来ることはまずない。

3、世界中で同じような現象が起きており外国に逃げるのは得策ではない。

無人島や離島に逃げるのが得策だろう（避難所は多数の人間が来るのでそれにまぎれてゾンビが来るのでやめておいたほうが良い）

4、東京で略奪者や頭のイカれた者たちが確認されてるので注意したほうが良い。

5、これから食べ物が入るかが不明なので家にある保存が効く食べ物を持っていったほうがいい。

武器はリーチの長いものが良い。近づけば近づくほど噛まれやすくなるからだ。

とまあこれだけの情報が手に入った。

三人はダウンを着て用意した食べ物をカバンに入れ武器を持った。

時計を見ると4時になっていた。

「よし、行くぞ！」

俺は玄関の扉を開けた。

第三章 情報（後書き）

次回、別目線から始まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2005z/>

そして世界が終わった頃に・・・

2011年12月11日15時45分発行